

お年寄りの奇行
(年取るといふこと日誌から)

CL教育研究会 遠間美保子
amhotm@gmail.com <http://docl.jp>



2016/05/06

朝6時前、反対側から道路を自転車でわたってくる大学生らしき二人の女の子が目の前に。長い髪に白いショートパンツからすらりと伸びた長い素足が目飛び込んで頭も体もしゃっきりと目が覚めた。短くて曲がった足の私は、元気に生んで育てていただいた両親には内緒で「ああ、生まれ変われるならあんな足で生まれてみたい」と後姿を見送った。その夢が叶うのもだいぶ近くなった。

2016/05/12

<美しい光景>

20メートルほどの高い樹木に覆われた寺院奥の坂道を下ると、さらに境内に続く階段がある。階段の上を本堂と荒行堂をつなげる屋根のあるわたり廊下が横切っている。廊下の中央に当たる階段の上は大きな太鼓が置かれている。坂道からその建物の床下の先に境内を通る人の下半身が見える。ちょうどこの寺の僧侶が通り過ぎる。黒い法衣と真っ白の白衣から白い鼻緒の雪駄を履いた白肌の素足が足早に右、左と先に進んでいく。白黒の清楚な一瞬の美しさ。

2016/06/03

朝6時前、寺院奥の高い木立に囲まれた聖教殿前で体操を始める。15m以上になる樹木の枝から糸にぶら下がった4cmほどの毛虫が揺れている。少し離れているが目に入って気になる。木の上では一羽のカラスが大きな声で鳴いている。突然カラスが右肩のそばを羽音を立てさっと横切って、前方の石段脇に止まって動かない。以前カラスに子育て時期だったのか脅しをかけられたことがある。口になにか付いてみえたが、襲われるといけないので、帰ろうと外した帽子やサングラスを手にした途端、カラスは高く飛び去った。そこで体操を続ける。気になっていた毛虫が目に入らない。あれ、どこに行ったやら。地面には落ちていない。糸を伝い上った形跡はないし、そこでようやくカラスの生態を思い出した。鳥の目は小さなものまで見え、飛べるのだ。カラスは私を脅かそうとしたのではなく、朝食の虫を滑走して啄んだのだ。恐怖から思い込みで相手の状態が見えなくなると胆に命じた「ごめん、カラスさん」。

2016/07/02

ウォーキングの帰り6:30頃に乗る電車内でよく見かけるおじいさんの奇行。80才ぐらいだろうか、鏝のあるお洒落な帽子をかぶり、シャツにアイロンのかかったズボンを着ている。きょうは麻のような薄いジャンパーを羽織っている。舐めていた飴を手にあった飴の包みにしまっ、左ポケットにしまう。同じポケットから包みの飴を出して口に入れ、もぐもぐと飴を舐め始め、すぐに口から出して、ポケットからたたんである飴のカラを出して飴を入れる。舐めた飴のからを指で丁寧にたたむ。たたんだ包みと殻に入れた舐め残しの飴をいっしょに鞆の決まった場所にしまう。一つ一つの動作はゆっくりだが丁寧に秩序立っている。そして、飴を舐めるのがとても楽しみな様子。毎回会うたびにまったく同じ動作

をして、私と同じ駅で降りる。階段をゆっくり登って反対の階段を降りる様子だが、その後の素行は次回の奇行追跡。

2016/07/04

温めの湯舟に浸かっているとき、ふと行水の記憶が出てきた。終戦から4、5年しかたっていない夏休みの頃だったか、私は小学校低学年。日中、疎開した会社の寮の部屋の窓下、大きな木の陰で、母が洗濯に使う大きな金盥を地面に置いて、やかんや鍋で沸かした熱い湯を盥の中に何杯も入れ、さらに水を足して体が浸かれる温度にして、行水をさせてくれた。湯を沸かすといっても、私たちの部屋は建物の一番玄関に近い場所から水道のある場所まで4家族が住む4部屋分のドアを超えた先にある。そこから何度も水を運んだに違いない。薪と炭で火を熾したコンロで水を沸かすのだ。

結婚前はお箸以外は持ったことがないようなお嬢さん育ち、小さな華奢な体で力のない母を子供ができてからも周囲の人が助けてくれることが多かったらしい。

たった一回の行水で母にとってどれほど体に負担がかかったことだろう。家族のためなら自分の体を厭わず、晩年まで台所に立っていた母。亡くなる数年前には腰の上の背骨が飛び出して痛がっていた。親不孝な私たち兄妹のせいだ。その母に比べ私は仕事や健康の理由でどれほど力を温存しようと、重いものを運ぶ、握力がある作業を夫に頼み、力を惜しんでケチっていることか。いい年をして本当に恥ずかしいとはこのこと。砂の数ほどの「ごめんなさい」と山の数ほどの「ありがとう」は増える一方。さて、次のなすべきことは。

2016/9/28


朝食にジャーの蓋を4つ開ける。トーストにバターピーナッツを塗ろうとして、開けたばかりの蓋を膝の間から床に落とす。両手がふさがっているからと勝手な理由をつけて後で拾おうと食事を続ける。食後の片付けの時、「CL課題の一つにあるキャップをきちんと閉める」通りに3瓶と3つの蓋を合うものどうしに閉めようとするが、どうも一つが違う。別の瓶が開いていてそれに合う蓋だ。一つ足りないのがわかり、ようやく落としたままの蓋を思い出しカウンターの向こう側の床に忘れられた蓋を拾ってジャーにはめると、ぴたりと収まった。「落とし物はその場ですぐに拾う」を怠ると手間暇が余計にかかる何度繰り返す学ぶことか。事実さまもうんざりに違いない。

2016/10/16

朝8時、駅前発都バスに乗り込んで後方の一段高い二人用座席に座る。行き先は「高齢者医療センター」で下町に住むお年寄りが無料パスで多く乗ってくる。前方の4人掛け優先席中ほどに座った80代後半と見える小柄なおばあさんが、やおら入れ歯を口から出すのが目に入った。そして口をモグモグさせてから口の中に戻す。うまくはまったか試すのか口をもぐもぐしてだめだったらしく、また入れ歯を出して手に取る。口をモグモグして、口に入れ、舌ではめるのか、カタカタ音をさせる。すると、また出して手に取り、口に入れる。出し入れは頻繁で、やめる様子はない。どうもこの奇怪な行動はおばあさんの癖のようでバスを降りるまで続けるようだ。隣に小太りの中年男性が私同様気になるのか、おばあさんのしぐさから目を離さずじっと見つめている。

長く観察するのに相応しい対称ではない。窓外を眺めてもカタカタと音が聞こえて注意が喚起される。そのうち4つ目ほどのバス停で隣の男性が降りると、おばあさんは端の席に移り、姿が隠れ見えなくなり、音はバスの走行音で消され、気にならなくなった。終点近くで乗客が少なくなってくると、いつの間にかおばあさんは降りていなくなっていた。人のなすべきことはいろいろだが…。

(千葉県市川市CLインストラクター)

 [目次へ戻る](#)